ゴトゴトシネマ通信

vol.8
発行：2018年5月12日

●今回の上映作品について

「すばらしき映画音楽たち」

本日は「すばらしき映画音楽たち」高知上映会にご参加いただきありがとうございます。「ロッキー」「ジョーズ」「007」「スター・ウォーズ」「E・T・」などなどなど、本日は往年の面白い映画が数々登場しますが、皆さんは、これらの映画をどこで観てましたか？

中村出身のゴトゴトシネマは映画館といえば今はなき大陽館なのですが、それよりもなによりも子どもの頃はテレビで映画をたくさん観たように記憶しています。荻昌弘さんの月曜ロードショー、水野晴郎さんの水曜ロードショー、それから日曜日の夕方には淀川長治さんの日曜洋画劇場がありました。中学生ぐらいからは全部見てたように思います。週末の土曜日には古い映画もやってたし、正月とか深夜に「猿の惑星シリーズ」を毎晩見ていたような記憶もあります。しかしながら、現在の地上波テレビで映画の番組ってほとんどありませんよね。さみしい限りです。映画は基本的に勧善懲悪なので、子どもの人格形成とかにもいいと思うんですけど…。

まあそういう話はさておいて、本日登場するのは私と同年代かちょっと下ぐらいの方には親しみのある往年の名作ばかり。知られざる音楽家の皆さんの創意工夫、苦闘に感じ入りながら、往年の名作の名シーン、名音楽に一緒に心を震わせましょう。

左から淀川長治さん、水野晴郎さん、荻昌弘さん。伝説の映画解説御三家。

●今後の上映作品について

「辺境音楽ＦＥＳ」
6月30日～7月1日@メフィストフェレス

「被ばく牛と生きる」
7月28～29日@メフィストフェレス

「辺境音楽ＦＥＳ」でご紹介する「遊牧のチャラパルタ」は、はりまや町の名物カフェkruhの女将テルちゃんのリクエストでその存在を知った作品。「は？ チャラパルタ？」というところから始まって視聴したらこれがまた面白くて上映を決めました。

しかしながら、配給元からは「ミュージシャンの宣伝用に取り寄せた作品なので、単独での上映は認められません。他の配給作品と抱合せでやってください」とのオーダーが…。視聴して気に入ったものしかやらないことを信条にしているゴトゴトシネマとしては「ノーサンキュー！」な展開でしたが、その抱き合わせ候補を聞いてみると「炎のジプシー・ブラス」「ベンダ・ビリリ！」と、観たことがあって最高の音楽作品ばかりじゃあ～りませんか。2つ返事で「イエスプリーズ！」となりました。…というわけで実現したたいそう贅沢な3本立てです。どれもこれもぜひ観ていってくださいね！

「被ばく牛と生きる」の方は、ゴトゴトファミリーも原発事故をきっかけに千葉からUターンしているので気になっていた作品。強く興味を持っていたのですが、しばらく声をかけられずじまいでした。何故かといいますと、ゴトゴトにとって映画上映をやっていて一番しんどいのが、視聴した後、内容がそぐわずお断りすることなのです。特に、ゴトゴトでやっている映画は監督さんや配給会社さんがしっかりと信念を持って制作、配給されているものが多く、ホント人生をかけた、社運をかけた1本！ というのばかりなのです。なので、まず視聴させてもらう段階からリサーチにリサーチを重ね厳選しまくっているのです。

「被ばく牛」も、松原監督が経営する会社を傾けてまで信念を持って作られた事を風の噂に聞いておりましたので、接触するまでにだいぶ検討を重ねました。が、観てよかったです。素晴らしい内容のドキュメンタリー作品に仕上がっております。こちらも、ぜひぜひご参加ください。

gotogoto cinema　上映詳細はチラシ、HP、FBにて

●ゴトシネマヒストリー　vol・7

2回目は永遠の名作・寅さん！

張り切って上映した「網走番外地」の集客が不発に終わった理由が「ヤクザ映画と誤解されたから」だと、ヒアリングの結果理解したゴトゴトシネマ。1月に上映する土佐山桑尾公民館上映2作目の選考に励みました。「やっぱりハッピーなやつがいいよね」「正月だし」…とここまで熟慮したところで閃きました。日本の正月映画はこれしかない！ 男はつらいよ、寅さんだ！

忘れもしません、正月に東京・池袋の普通の映画館で寅さんを見たときの衝撃の光景を。それまで寅さんは、子どもの頃テレビで見るか、大陽館でたまに見るかぐらいだったのですが、何を考えたか、上京して大学生をやっていたこの時、ふらっと見に行ったのですね。そしたら、お客さんが沸いてること沸いてること。

寅さんがとらやに帰ってくるあたりのあのお馴染みのチラ見せシーンなんか、「ほら、後ろ！ 寅さん来たぞ」「さくら、後ろ、後ろ見ろ！」とかお客さんがスクリーンに向かって大声で教えてあげててサジェスチョンしてて…。タコ社長登場のシーンでも「タコだよ～」とかギャンギャン湧いてて、もうスクリーンと客席がコールアンドレスポンスの渦。「ああ、これが男はつらいよという映画の本質なのか」「映画ちゅうのはこういうものなのか」と目が覚めるような体験でした。

よし、これで行こう、日本の正月は寅さんだ！ それからシリーズの各作品の内容を吟味。なんと寅さんは高知に来ていないという衝撃の事実も分かり、選考は難航しましたが、マドンナを名優・浅岡ルリ子さんに決め、数々のレビューを読み視聴して、シリーズナンバー1の呼び声高い「寅次郎相合い傘」に決定しました。前回同様、チラシも作って家々を周り映写テストもオッケイ。1月31日の本番を迎えたのでした。さて、その結果やいかに！？

制作したポスター

（つづく／ゴトゴトブログより転載）